＊

わたしの故郷の話をしよう。

わたしの生まれ育った街、パレンツォは、イストリア半島の西側にある港町だ。ポレチュと呼ぶひともいるけど、わたしはその呼び方は嫌い。突如現れた謎の存在「ネウロイ」の脅威がオストマルクに迫り、カールスラントが陥落しても、ひとまずは安全だった。それはヴェネツィア軍が頑張っていたからで、もちろんその「頑張った」中にはわたしもいる。ネウロイの瘴気に近づけるのは、わたしたちウィッチ――魔力を帯びた十代の乙女だけなのだ。去年、ガリアがついに解放されたという報せを聞いて、よかった、これでもう欧州は大丈夫だ、と思った。

でも、ついこないだ、ネウロイはわたしたちの頭上に現れた。わたしたちヴェネツィア軍と、ロマーニャ人に率いられた連合軍第五〇四統合戦闘航空団が迎撃したけれど、結局、大損害を出して負けてしまった。ヴェネツィア本市だけじゃなく、フリウリやイストリアなど隣り合った地域までネウロイの巣に覆われて、わたしのパレンツォも今はひとの住めない土地になってしまっている。麗しのアドリア海にまでネウロイの手が伸びてくるなんて、信じたくなかったけど現実だ。

ヴェネツィア軍は本市の周辺から撤退して、ある部隊は避難民とともに南下してロマーニャ領に入り、ある部隊はラグーザに籠城し、そしてある部隊は、アドリア海の水運を支えている諸都市があるダルマツィアさえも放棄して、そのさらに奥の山岳地帯で抵抗を続けている。

まあ――それが、わたしのいる部隊なわけだけど。

麗しのアドリア海から遠ざかり、こんな山奥に逼塞しているというだけで腹立たしいのに、わたしのいる部隊は戦力が目減りしているので、現地に駐屯していた部隊を指揮下に組み入れることになった。そしてわたしの部隊の仲間たちは、現地人中心に編成された部隊にバラバラに配属され、それぞれの指揮を執っている。

異郷で、異邦人たちの部隊を指揮するわたし。こんなことになるなんて、夢にも見なかった。一応、ここボスニアはヴェネツィアの領土なのだけど、とてもそういう気がしない。少なくともわたしにとっては異郷でしかなかった。ここにはヴェネツィアを思わせるものがなにもない。

それでもわたしは、この異郷を護り抜かないといけないのだ。

それが、わたしの故郷の話。

＊

「サヨ！」

ボシュキチを呼ぶ声。彼女はその方向に向け返事をし、駆け出していく。丘の上の指揮所からはその方角がよく見通せた。丘の下の、乱雑で東洋風の街並み。ところどころに尖塔が立ち並び、奇妙な響きの呼び声が風に乗って聞こえてくる。ヴェネツィア風の建物もあるにはあるが、むしろそれらも相まって渾然とした景観が作り出されており、結果として街はどこまでも異国情緒を漂わせたままだ。そして、旅行者でないわたしはそれに感銘を覚えられない。

呼び止めようとは思わなかった。急ぎの仕事はないし、彼女の用事に干渉するつもりもない。だいたい、彼女がいない方が気が楽ではあった。

椅子に座って、地図を眺める。ボスニアからイストリアまでを指でなぞってみた。地図だとほんの数センチなのに、実際には気が遠くなるほどに遠い。何度目かわからない溜息をつく。

ふと、物音がした。振り向くと、そこには小柄な現地人のウィッチが立っていた。こちらを睨み付けるように見る目。

「……アヴディチ曹長。なにか御用かしら」

「――おまえに用なんてない。あたしはサヤに用がある」

どうやら、わかりやすく嫌われているようだ。元々、わたしはここの人間と馴れ合うつもりはなかったから、そちらのほうがありがたい。完璧に事務的な口調で告げた。

「ボシュキチ少尉なら、誰かに呼ばれてあちらのほうに向かったけれど」

「そうか」

指揮所に用がないという言葉は本当らしい。アヴディチはなんの未練も感じられない速さで身を翻しながら、小さく呟いた。
「あたしは、おまえが嫌いだ」
「そう。それはなによりだわ」
澄ました顔でそう言うと、アヴディチは舌打ちの音も高らかに、天幕の中にしつらえられた指揮所から出ていった。それを見やり、もう一度溜息をつく。
正直な話、わたしはこの土地を護り抜くことになんらの使命感も持てなかった。ここをいくら護っても、パレンツォが解放されないのなら意味がない。ロマーニャ方面には、ヴェネツィア上空の戦いで消耗した連合軍第五〇四統合戦闘航空団にかわって、ガリア解放を成し遂げた連合軍第五〇一統合戦闘航空団が駐留している。彼女たちと協力して戦えば、ヴェネツィア本市解放も夢ではないだろう。けれど今わたしは、上官の決断のせいでこんな山奥に駐留している。
歯痒かった。
ふいに、無線が音を立てる。哨戒に出していたウィッチからの通信だろうか。耳を傾けた。緊張した声が、事態を説明する。
《――西北方面にネウロイが飛来しています。近隣の市街地に到達するまで、およそ二〇分。高度およそ四〇〇メートル。中型の個体です》
要を得た報告に、こちらも短く返答を返す。
「わかったわ。すぐに隊を編成して向かいます。そのままそいつを監視していて」
わたしの指揮下にあるのは四人。中型のネウロイならば、哨戒のウィッチも合わせて三人もいれば充分だろう。そう考えて、二人の少女の名を呼んだ。
「ボシュキチ少尉！　アヴディチ曹長！」
指揮所は丘の上に設営されている。声はよく届くはずだ。ほどなくして二人ともやってきた。
「どうしたの、ヴィゼンティン中尉」
「少尉、臨時にここの指揮を執りなさい。曹長、出撃するわよ。準備をなさい」
「なっ……なんであたしが、おまえと出撃するんだよ！」
「それが適任だからよ。これは命令」
短く答える。アヴディチは歯軋りをすると、黙ってストライカーユニットの格納されている天幕へと足を向けた。わたしもそれに続く。確かにわたしはこの土地を防衛することに気が進まないけれど、だからといって任務を疎かにすることはできない。そしてわたしが出撃するのなら、隊内の序列ではわたしに次ぐ地位にあるボシュキチに指揮所を委ねるのがいいだろう。一応、ボシュキチは速成とはいえ士官としての教育を受けているはずなのだから。そして、わたしとボシュキチの次に技倆が優れているのは、このアヴディチだろう。だから彼女を選んだ。もちろん、そんなことを説明する必要はないし、そんな余裕もない。天幕に飛び込んで、ストライカーユニットを脚に装着する。魔力を発動させるためには使い魔が必要だ。その耳と尻尾が生えてくる。わたしの使い魔は、白地に黒い斑のある犬。なにも言わずに、空に飛び立った。額を風が叩く感触で、わたしは空を飛んでいるのだと実感する。
ほどなくして、哨戒のウィッチと合流できた。彼女が指し示す方角を見やる。ネウロイはだいぶ市街地に迫ってきているようだった。一瞬のあいだに、採るべき戦術を脳裡に組み立てる。
「曹長、あなたは背後に回り込んで攻撃して。軍曹、あなたはわたしについてきて、とにかく撃つのよ。いい？」
二人とも無言で頷いた。アヴディチは不満げだが、わたしの指示が合理的だと認めているのだろう。アヴディチはなにも言わずにその場を離れ、ネウロイの背後へ向かう。
「行くわよ」
わたしは軍曹に声をかけると、ネウロイへと突っ込んだ。コアの場所が特定できない以上、まず装甲を傷つけることを考えないといけない。背後に回り込んだアヴディチと共同で、装甲を削っていく。ネウロイは赤い光線で攻撃してくるが、シールドを展開して防ぎきった。意外と簡単にコアは見つかり、わたしはそれを指して命令する。
「一斉射撃！」
端的な号令。三人分の火線がネウロイへと伸びて、コアは呆気なく砕け散った。
「全機、帰投します」

短く告げ、高度を下げる。地上を一瞥すると、市街地にわらわらとひとが溢れているのが見えた。手を突き出しなにかを叫んでいるようだ。だが高度のせいで聞き取れない。

「彼らは感謝を叫んでいます、中尉」

軍曹が告げてきた。わたしは答える。

「そう。耳がいいのね、軍曹」

わたしは心からそう言った。わたしは彼らのために戦ったわけじゃない。なら、わたしがその感謝を受けるのは間違いだし、そもそもお礼を言われる謂われがない。

「おまえ……」

アヴディチがなにかを言いかけて、口を閉ざした。なにを言いたかったのだろうか。まあ、予想はつくけれど。それでも、ここはわたしのいるべき戦場じゃない。

速度を上げると、市街地はあっという間に視界の彼方に消え去った。

＊

「おかえり、みんな」

わたしを迎えたのは、そんな暢気な声。その声の持ち主に、アヴディチと軍曹は駆け寄る。

「サヨ！」

彼女は慕われているようだ。部下を掌握する素質は、士官に求められる素質の一つでもある。ここは彼女の戦場であり、その限りで彼女はよい士官になる素質を持ち合わせているのだろう。もちろん、よい士官であることと、今のわたしにとってよい戦友であることとは必ずしも結びつかない。

「ヴィゼンティン中尉も、おかえり」

指揮所に向かおうとした背中から、声がかけられる。わたしは背を向けたまま答えた。

「――ここはわたしの家じゃないわ」

「そうだよ。わたしにとっても、ゾラナにとっても、そう。でも、ここはわたしたちの居場所で、わたしたちが帰ってくるところだよ、中尉」

その言葉に、堰き止めていたなにかが破れた。

「ええ、そう――あなたたちにとっては、ここはきっと居場所なのでしょう。けれどわたしにとっては違うわ。わたしにとって居場所とは、パレンツォでありヴェネツィアなのよ。ここは、わたしの居場所じゃない」

早口で吐き捨てて、そのまま指揮所へ向かう。アヴディチが一瞬息を呑んだあと、なにやら悪態をついているようだけど、そんなのはどうだってよかった。ボシュキチの返事は聞こえなかった。彼女もようやくわたしと馴れ合おうという気をなくしたのかと思って、ほっとする。

指揮所の天幕に入ると、報告書を取り出す。最新の記録をつけながら、ぼんやりと、実際には諸々の理由で実行不可能であろうロマーニャへの転属という夢想を弄ぶ。そうできたら、どんなにいいだろう。もちろん、ダルマツィアの状況が予断を許さない以上、そんなものは夢物語でしかない。だからわたしは一刻も早くダルマツィアに駆けつけないといけないはずなのに、こんな山奥で油を売っている。急に自分が惨めに思えて、それ以上考えるのをやめた。

報告書の様式はだいたい決まっているから、定型句に日時や固有名詞を乗せていくだけでよかった。割合に早く書き終わって、伸びをする。ちょうどそのとき、天幕に一人の少女が入ってきた。ウェーヴがかかった髪の下にこわばった表情を隠して、わたしに封書を差し出す。

適当に礼を言って受け取った。上層部からの封書が連絡ウィッチの手で届けられたのだろう。封を切って、流麗な筆記体に目を通す。内容は他愛もないことだった。わたしは封書を運んできたウィッチに、確かに受領した、という書類を渡す。面倒だが、これも必要な手続きだ。

「……」

わたしにそれを届けにきた部下の少女は、書類を受け取ってもすぐには動かず、なにかを言いたそうにわたしを見ている。

「なに？　もう連絡ウィッチは行ってしまったの？」

「いいえ。待たせてあります」

「なら、さっさとそれを渡して」

「……わたしは、ウィッチに憧れていました。ネウロイと戦って、祖国を護る英雄だと」

唐突に紡がれた言葉に、わたしは溜息をつくのを堪えて返答する。
「すでにあなたはそういう存在だわ」
「では、中尉は――中尉は、どうなのですか。あなたは祖国を護る存在ではないのですか」
「わたしはそのつもりよ。わたしはわたしの故郷のために戦っているわ」
俯いてくちびるを噛んだ少女はまだなにかを言いたそうだったが、やがて指揮所から出ていった。一人取り残されて、ふぅ、と息をつく。
……明日から、わたしの命令を聞く部下はいなくなるかもしれない。そう思ったけれど、同時に、それでも構わないと思った。彼女たちの故郷は彼女たちが護ればいい。わたしはただ、この任務から一刻も早く解き放たれて、ロマーニャへ、そしてヴェネツィアへと飛んでいきたかった。どうして、それがかなわないのだろう。
指揮所を出て自分の天幕へと潜り込む。夜というにはまだ早かった。それでも、今はとにかく目を閉じていたいと思った。

＊

「ヴィゼンティン中尉、仕事、一段落ついた？　コーヒーを淹れたの。飲まない？　ボスニア風だから、中尉の口に合うかどうかはわからないけれど――」
てっきりわたしと馴れ合うのをやめたのかと思ったが、そうではなかったらしい。あの諍いから一週間ほどが経つが、ボシュキチの態度は以前と変わらず馴れ馴れしかった。スカーフを被った頭を、ぼんやりと見つめる。
「……あなたは、わたしをどうしたいの」
思わず尋ねていた。ボシュキチはわたしを見返す。
「どうしたい、って？」
「わたしに構わないでいてくれればいいのよ。こうやって指揮所に話をしにこなくてもいいでしょう。なのに――どうしてそうやって馴れ馴れしくしようとするの。わたしはそういうのは」
嫌いだわ、と言いかけたのを辛うじて堪えた。ボシュキチは、んー、とくちびるに指を当てて考え込む。ややあって、言った。
「……わたしは」
――そのとき、無線が入った。
《ネウロイの編隊が高速で接近中！》
すぐに無線機に向かい合う。今日の哨戒はアヴデイチだ。どうやら彼女が憎まれ口を叩く暇もないほどの編隊であるらしい。
「曹長。方角と規模は？」
《指揮所の東北、およそ二〇分で到達する！　規模は、大型が二、中型が五機以上！》
「――わたしたちだけでは防げないわ」
その判断は即座に下せた。眼鏡を押し上げる。
「近隣の分遣隊にも出動を要請します。曹長、あなたは帰投しなさい。一度後退して部隊を編成するわ」
《で、でも――街が！　やつらと指揮所のあいだには、街がある！》
「……フォイニツァだ」
ぽつりと、ボシュキチが呟いた。けれど今は、そんなことに構っている余裕はない。
「……一分間だけ時間をあげる。街の住民に避難を勧告して。そうしたらすぐ帰投するのよ、いい？」
《そんな――》
「いい、彼我の戦力差を考えて。わたしたちはその敵には勝てないのよ。わたしたちが出撃したところで、兵力の逐次投入に過ぎない。無駄に戦力を消耗するだけだわ。――これは命令よ。帰投しなさい」
《――ッ！》
ぶつり、と派手な音を立てて無線が切れた。わたしはすぐに別の周波数を呼び出す。近隣の分遣隊にも応援を仰がねばならない。
「フランカ、聞こえる？」
《ああ。マリア？》
「そうよ。ネウロイの編隊が出現、本隊だけでは対応できない。応援を請う」
《わかった。すぐに駆けつける。規模、方角、距離を教えろ》
詳しい情報を伝えて、通信を切った。他の隊にも連絡する必要があるだろう。そう思ったとき、メッサーシャルフのエンジン音に気付く。慌てて外に飛び出した。そこには、真剣な表情でストライカーユニットを履いた少女の姿。